

## 第二章 昭和十三年～二十七年 (一九三八～一九五二)

### 戦中・戦後の演奏会

プリングスハイム辞任のあと、昭和十二年の秋に、東京音楽学校管絃楽団はハンス・シュヴィーガー Hans Schwieger (一九〇六～ ) を指揮者に迎えた。彼はダンテツヒ国立歌劇場総監督で、ナチス音楽家の最高の名誉称号である「ゲネラルムジークディレクター」を与えられ、第一級の音楽家として来日した。だが着任早々指導上の問題で学校側と対立し、結局一度も演奏会を行わず帰国する事態となった。

シュヴィーガーに代って昭和十三年四月から若いドイツ人指揮者ヘルムート・フェルマー Helmut Fellner (一九〇八～一九七七) が雇い入れられた。

徐々に彩られてきた戦争色は、昭和十六年(一九四一)十二月八日の太平洋戦争勃発で、完全に世の中を覆ってしまった。政治はもちろんのこと、経済・教育などすべてが軍部の手中に収められた。このような状況の中で音楽活動は報国団という団体に属して行われた。報国団とは演劇・音楽・大衆芸能などの俳優・音楽家・芸人たちを総括した団体で、その活動は軍の監視下におかれた。この頃、「音楽は軍需品なり」という言葉を残した人があった。この人は内閣情報局の平出英夫海軍大佐で、昭和十六年七月二十八日「高度国防国家建設と音楽の効用」と題する講演の中で発言であった(『近代日本と音楽』日本音楽舞踊会議編、あゆみ出版、一九七六年、一四八頁)。その意味は「高度な音楽訓練を受けた人は、戦場において敵の動きを音感でいち早く察知することができる

味方を有利に導く。故に音楽は軍需品なのである」というものであった。その後「音楽は軍需品なり」との建前から音楽挺身隊が結成され、山田耕筈が隊長となって大いに活躍したことはよく知られている。

この時代の東京音楽学校演奏会は、定期演奏会を除き、もっぱら報国団の恤兵演奏が主となっていた。フェルマーは緊迫した情勢の中で自己を抑え、制約された演奏活動を余儀なくされたとはいえ、東京音楽学校管絃楽団の質を落とすことなく、プログラムに見られるような格調高い演奏を行った。日・独・伊同盟によって英・米の音楽(ジャズなど)は追放されたが、ドイツ音楽を中心とする音楽が絶えることのなかったのは幸いであった。

昭和十五年、昭和時代最大のイベントであった紀元二千六百年の祝賀が行われた。この祝典では当時のわが国の代表的な七大管絃楽団(宮内省楽部、東京音楽学校管絃楽団、新交響楽団、中央交響楽団、星桜吹奏楽団、東京放送交響楽団、日本放送交響楽団)を動員して「奉祝交響楽団」を結成し、お祝いとして贈られてきたヨーロッパ四カ国の「祝典音楽」が演奏された。その中のR・シュトラウス作曲《Festmusik》はフェルマーが指揮した。

戦争中をふりかえって、もう一つ忘れられないのは悲劇の象徴ともいえる学徒出陣である。昭和十八年十一月、東京音楽学校主催でフェルマー指揮のもと、学徒出陣壮行演奏会が共立講堂において行われた。

定期演奏会は、昭和十八年十二月十八日比谷公会堂において行われた第一〇一回以降、昭和二十四年まで中断を余儀なくされる。

東京音楽学校に明るくはらず音がもどったのは昭和二十年(一九四五、八月十五日終戦)秋。戦争から解放された教官および生徒たちはフェルマーを中心に管絃楽団を復活させた。翌年の秋、戦後最初の芸術祭を音楽学校と美術学校が合同で開催した。日本の敗戦という形で終結した生々しい戦争の傷跡もまだ癒えない時代ではあったが、教官も生徒も一つになって、全校をあげ、真の平和のよろこびを芸術の祭典で祝した。

世間の落ち着きと共にわが国の文化活動も徐々に復活し、新しい民主化の一環として「教育刷新委員会」が設けられ（昭和二十一年八月九日）学制改革が行われることになった。二十三年（一九四八）秋には東京音楽学校も美術学校と合併して、東京芸術大学に昇格することが決定した。ちょうどこの年は創立および音楽教育創始七十周年目（音楽取調掛設置年から起算）に当り、十月二十六日から二十八日まで帝国劇場を借り切って記念祭を催した。翌二十四年三月の奏楽堂における記念演奏会（創立七十周年）には天皇（昭和天皇）・皇后両陛下の行幸啓を仰ぐことができた。この一連の行事は、まさに東京音楽学校の最後を飾るにふさわしい祭典であった。同年五月、東京芸術大学音楽学部が発足し、制度上、東京音楽学校は幕を降ろした。だが東京音楽学校はその前年の四月に最後の生徒を入学させ、彼らが卒業する昭和二十七年三月まで、事実上存続した。

(1) シュヴィーガーは辞任せざるを得ない心境を昭和十二年十一月八日付け書翰で乗杉校長宛に述べている（『外国人教師関係綴』昭和十二年〜十三年、一八三〜四丁）。当時、この件に端を発し、新聞・雑誌等で東京音楽学校批判が多く行われた。なお、シュヴィーガーは昭和四十九年客員教授として再来校、音楽学部オーケストラを三年間にわたって指導した。

(2) フェルマーはドレスデンの出身。ザクセン国立管弦楽学校を一九二八年に卒業、同年より三年までヴァイマルのドイツ国民劇場副指揮者、この間イエーナ大学で音楽学、哲学、芸術史学を修める。三年同劇場の楽長となる。同年チューリンゲンのオルテンブルク市立劇場指揮者に転ずる。また作曲家、ピアニスト、伴奏者としても活躍。三八年（昭和十三年）東京音楽学校教師として来日、管弦楽と合唱の指揮ならびに作曲の指導に当った。昭和二十一年三月三十一日まで在職。帰国後はハンブルク国立歌劇場の合唱指揮者を務めた。一九七七年三月二十日（六十八歳）没。

(3) 日本政府で組織されていた「内閣紀元二千六百年祝典事務局」は欧米六カ国に祝典の交響的作品を依頼した『音楽評論』第九卷第九号・十号、昭和十五年九月号・十月号。その中でアメリカを除く五カ国より次の五曲が贈られてきた。

Richard Strauss: Festmusik zur Feier des 2600 jährigen Bestehens des

Kaisereiches Japan, Op. 84 [「レイン」]  
 Jacques Ibert: Overture de fête (1940) [「フランス」]  
 Ildebrando Pizzetti: Sinfonia in la (1940) [「イタリア」]  
 Sándor Veress: Szimfonia (1940) [「ハンガリー」]  
 Benjamin Britten: Sinfonia da requiem for full orchestra, Op. 20 (1940) [「イギリス」]（この曲は当日演奏されなかったが、自筆譜は東京芸術大学附属図書館に保管されている。）

昭和十三年一月二十九日 研究科生徒ピアノ演奏会

昭和十三年一月二十九日（土曜日）午後二時開場  
 二時卅分開演

於 本校奏楽堂

ワインガルテン教師 担当研究科生徒 ピアノ演奏曲目

東京音楽学校

1. バツ ハ作… パルティータ・ハ短調… 角倉美彌子  
 2. ベートーヴェン作…

(a) ロンド・ト長調・作品五一 } 井川都  
 (b) ポロネーズ・作品八九 }

3. ヨーゼフ・マルクス作… プレリユードとフーゲ・

変ホ短調… 志賀登喜

4. ラクマニノフ作… 第二協奏曲・ハ短調・

第一樂章… 永井進

——(休憩)——

5. シューマン作… 交響的練習曲・作品一三… 大澤ハル